
白い暗殺者

い〜ちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白い暗殺者

【Nコード】

N9005A

【作者名】

いーちゃん

【あらすじ】

『漆黒の死神』が起こした事件から早10年。世界は一応平和を保っている。そんな情勢の中『黒き征裁』創立の学園に入学した1人の男子生徒を中心に世界の平和が崩れていく……！前作、『黒き征裁』に続く第2段……！！漣亮の運命は……？亮の父親は……？『漆黒の死神』との決着は……？謎が解き明かされ、また謎を生む、学園ファンタジー。さあ、君も一緒にこの世界へ飛込もう……！！

プロローグ（前書き）

この作品は『黒き征裁』の続編です。

『白い暗殺者』だけでも楽しめますが、『黒き征裁』を読んで頂くとより一層楽しんで頂けます。

『黒き征裁』を読まれていない方は是非とも『黒き征裁』も読んでみて下さい。

前作から引き続き読んで下さっている方は、前作よりもいい作品にしたいと思いますので今後ともどうぞよろしく願います。

前作で残った謎も解明していきたいと思いますので気長にまっておいて下さい。

では、『あの日』から10年後の世界です。
どうぞお楽しみ下さい。

プロローグ

長かった冬がようやく諦めて春が頑張り暖かくなって来たころ、ウィクランドにある黒征学園では第3回目の入学式が行われる事になった。

黒征学園は10年前のまだ霊力と言うものがあつた時代には優秀な人材を集めて戦闘の英才教育を行う場所だったらしいが、今では、すこし主旨が変わっている。

10年前に『黒き征裁』を中心とする『漆黒の死神』が霊力源を潰したとの噂が流れてから突然とある勢力がでて来た。

噂によると西院学園と言う学園の元生徒らしく、『黒き征裁』とも繋りがあつたらしい。

その集団が世界各地の戦争を抑え周り、今では表面上の平和がこの世界に訪れている。

戦争中の世界の中心であつた、古代3ヶ国はバラバラに分裂し、世界の中心であるウィクランド世界平和維持隊本部を設置したその勢力が今の黒征学園を運営している。

世界平和維持隊は世界各地から優秀な人材を集めて、将来の諜報員を育てているのだ。

その理由は世界の各国は表面上の平和は保っているものの、裏では殺し屋や暗殺者を使い、他の国を滅ぼそうとしているのを阻止する為である。

ちなみに黒征学園の理事長は高波雄輔と言う男がやっている。

昔は『黒き征裁』の右腕の情報屋としてかなり活躍したらしい。

世界平和維持隊のトップの2人も昔『黒き征裁』と同じぐらい強かつたらしい。

『暗黒の死神』の話は都市伝説としてほとんど知っている子供が今はかなり多い。

黒征学園に入る男子はほとんど『黒き征裁』に憧れて入って来る。

もちろん平和維持隊のトップである上坂拓也や安永順一郎に憧れて入って来る奴もたくさんいる。

過去の黒征学園は学部と言うものがなかった。

しかし、今は暗殺、殺し屋、情報操作局、事後処理局の4つに分かれている。

殺し屋部門は名前の通り殺し屋になり、暗殺部門は秘密の仕事なども扱い、情報操作局は補佐及び情報収集、事後処理局は事後処理の全てを行う技術を身に付ける。

だいたい女子は情報操作局に所属する。

霊力がなくなった今、霊力があつた時よりもかなり技術が高くなつていて、機械などの施設もかなり充実している。

これが今の大体の現状だ。

そして、この春に入学する85人の内、一般入試で入ったのが5人、推薦入試で入ったのが75人、特別推薦枠で入ったのが5人である。特別推薦枠とは世界平和維持隊が直接選んで集めて来た世界各地のエリートである。

特別推薦枠で入学した生徒の殆んどは将来、世界平和維持隊の本隊に配属される。

しかし卒業できるのは入学者の半分ぐらいらしい。
なぜそうなるのかはわからない。

そんな黒征学園の入学式が今まさに行われようとしていた。

第1話

ワイクランドの黒征学園では今まさに入学式が始まろうとしていた。まだお互いに知り合いじゃないせいかな、喋っている者はいない。

理事長の高波雄輔が舞台に上がる。

上がった後も前も静けさに変わりはない。

本当に皆生きているのか不思議なくらいだ。

「ようこそ黒征学園へ。私は理事長の高波雄輔だ。」

その静けさに雄輔の声は朗々と響いた。

「諸連絡及び注意などは担当の先生にしてもらう。」

余計な話などせず、必要最低限の話を告げて雄輔は舞台から降りていった。

それから生徒にクラス分けのプリントが渡された。

殺し屋クラス30人、暗殺者クラス20人、情報収集クラス20人、事後処理クラス15人と言うクラス分けだった。

それから15分後にはそれぞれのクラスで点呼が行われていた。

暗殺者クラスでは、遅刻者がいるらしい。

「東武風牙。……東武はいないのか?？」

暗殺者クラスの担任の斎藤が言うが返事はない。

すると、突然教室のドアが開いた。

「すいません!!遅れた!!……ました。」

「……………」

クラス中に沈黙が流れる。

「えーと。マジでごめんなさい。どうやらこの作者は主人公を遅刻させるのが好きらしくて……。」

意味不明な事を言いながら風牙は開いている席に座る。

「……えー。次は……。」

どうやら斎藤は無視する事に決めたらしい。

「入学早々遅刻かよ。災難だな。」

風牙が座った隣の席の男子が話掛ける。

「ああ。かなり道に迷った。ややこしすぎるんだよこのへん。」

「あ、俺は忠岡正史って言うんだ。よろしくな。」

「東武風牙だ。風牙でいいぜ?」

「そこ!!!! 私語をするな!!!!」

自己紹介を終えた2人に斎藤の激が飛ぶ。

「注意事項や規律は今渡したプリントに書いてある。それと、お前達は今日から寮で生活する訳だが、外出時には外出届けが、外泊時には外泊届けがいるから注意するように。何か質問は?」

「寮の部屋はどうやって決めるんですか??」

正史が手を挙げながら言う。

「自由だ。それと午後からは学園案内って事になってるけど俺は忙しいから勝手に見学でもして来い。以上。」

斎藤のその言葉を最後に暗殺者クラスは解散になった。

ちなみに暗殺者クラスの男子の数は18人、女子は2人である。

「寮ってどこにあるんだ??」

遅刻したせいで何も知らない風牙が正史に聞く。

「学園領内にあるはずだぜ??」

「ふーん。じゃあ今から寮に行くか。」

そう言った会話の後、2人は教室を出て行った。

「風牙って推薦組??」

歩きながら正史の声に風牙が首をかしげる。

「推薦組??なんだそれ??」

「は?? だから一般入試なのか推薦入試なのか特別推薦枠なのか聞いてるんだよ??」

「一般入試?? 特別推薦枠?? 何だよそれ??」

「……推薦入試なんだな。わかった。」

「おい正史!!! 俺の質問に答えろよ。」

「ちなみに俺も推薦入試だ。」

「……………」

どうやら風牙は黒征学園の入試制度についての説明を潔く諦めたらしい。

「あ、ここじゃね?? 黒征学園男子寮って書いてるじゃん。」

「男子と女子分かれてるんだな。」

「まあしゃあねーよ。」

2人が中に入ると何人かの生徒がいたが、まだ多くはない。

「すいません。寮の登録したいんですが。」

正史が受付にいる管理人らしい人物に声を掛ける。

「クラスは??」

「暗殺者クラス。」

「じゃあB塔だ。何階ぐらいがいい??」

「1番上で。」

正史の後ろから風牙が叫ぶ。

「ちなみに俺も暗殺者クラスだからさ。こいつと隣の部屋で。」

「……………何勝手に決めてるんだよ??」

「いいだろ。1番上がいいに決まってる。」

それから10分ぐらいして正史は風牙に何を言っても無駄だとわかったらしく諦めた。

「……………しんどい…………。」

20階まで上がって来て風牙が言った。

「あたりまえだろ…………。1番上は30階だぜ??」

ちなみに黒征学園の寮にはエレベーターはない。

だから殆どどの生徒は下の階に住むのだ。

「でもいいだろ?? 1番上は俺達だけだよ。」

「屁理屈を言うな。」

30階に着く頃には2人とも何も話していなかった。

「…………。」

正史が何も無言でドアを開ける。

「正史。」

「何だよ??」

「荷物部屋に置いたら見学行こうぜ。」

「ああ。わかったよ。」

10分後には2人はまた息が上がった状態で1階のベンチに腰かけていた。

「どこに行く?？」

「とりあえずぶらぶらしようぜ。」

そう言って2人は歩き出した。

第2話

風牙と正史は廊下を歩いていった。

途中で先生に引率された殺し屋クラスと事後処理クラスとすれ違った。

殺し屋クラスと暗殺者クラスが仲が悪いからか、すれ違い様に嫌な視線が向けられたが、2人は無視をして通りすぎた。

ちなみに特別推薦枠で入った5人の内4人が殺し屋クラス、1人が事後処理クラスにいる。

「それにしてもさ、俺ら歩いてるだけで全然見学してないよな。」
呟く正史に風牙はすかさず答える。

「だってさっきから普通の教室しかねーじゃん。」

「まあなあ。」

それから10メートルぐらい歩くと校内地図があった。

「えーと。何か特別施設は……。」

「お。これ行こうぜ。」

そう言っただけで風牙は地図の左上を指す。

「シュミレーション室??」

「なんかすごそうじゃん??」

「まあ行ってみるか……。」

そう言う事で2人はシュミレーション室に向かって歩き出した。

「風牙ってさ、何で暗殺者クラスに入ったんだ??」

「んー。なんとなく……かな??」

「何だよそれ。」

「別にいいだろ。それより正史はどうなんだよ??」

「俺??俺は隠密に任務をするってのが懂れてさ。」

「へえー。けっこう真面目じゃん。」

「普通は真面目に考えるんだよ。」

そんな会話をしながら2人は歩いて行った。

他に廊下を歩いている人はいない。

「……何か寂しいよなあ。」

いきなり風牙が言う。

正史は一瞬答えるか迷ったらしく無視をしようとしたが結局は答える事にしたらしい。

「何がだよ??」

「いやあ。男2人でこうして歩いてるっていうのがさ。」

「……………」

「……無視すんなよ。」

正史は結局無視を決め込んでしまった。

「お。あれじゃね?? シュミレーション室。」

「あ、ほんとだ。」

いつの間にかシュミレーション室に着いたらしく目の前にシュミレーション室と言う表札が出ていた。

「鍵閉まっていたりしねえよな。」

「……………もっと早くに気付けよ。」

そう言いながら風牙はドアに手を掛けた。

開いていますようにと言う願望と共に一気にドアを開ける。

幸い、ドアは開いていたようで内に開いた。

しかし中には先客がいた。

「……………」

「……………」

中にいた生徒と先生が一斉に風牙と正史の方を向く。

「……何ですか?? あなた達は??」

メガネを掛けた知的な女性が話しかける。

年齢は30代前半ぐらいだろう。

「えーと。新1年生です……。」

「新1年生だと今は学園見学の最中のはずですが??」

「あゝ。担任の斎藤先生が忙しいから各自で見学しろって言ってきました。」

正史が事実を告げる。

「じゃあ見学に来たんですか??」

「はい。一応……。」

「なら後ろの方に座りなさい。今からシュミレーション室の説明をする所です。」

風牙と正史はその言葉におとなしく従い、後ろの方に座った。

ちなみに2人は気付いていないがこのクラスは情報収集クラスで、黒征学園で唯一女子が多いクラスである。

情報収集の具体的な仕事は主に暗殺者と関係がある。

暗殺者と協力して暗殺者を成功に導く情報をリアルタイムで与えるのだ。

優秀な情報家が付いていればどんな暗殺者でも必ずと言っていいほど成功率がかなり上がるぐらいに情報家は大切なのだ。

従って、暗殺者クラスと情報収集クラスは合同授業が多い。

「え」と。まず始めにここはシュミレーション室です。」

前に立った先生が説明を始める。

「シュミレーション室は、暗殺者クラスと合同で暗殺のシュミレーションをする為に使います。他にも過去にあった事例を再現してそのミッションに挑戦してみたり、殺し屋クラスなんかでは決闘などのシュミレーションをします。」

それから10分間配られたプリントを参考にしながら先生は話を進めた。

要するに、デモンストレーションや経験値を上げるために使うらしい。

「では、何か質問はありますか??:……………なければ終わります。暗殺者クラスは知りませんが情報収集クラスは今日はこれで解散です。」

そう言って先生は教室を出て行った。

「うわー。なんか近寄りがたい女性ですね。」

風牙が率直に感想を述べた。

「ってか情報収集クラスだったんだな。」

「情報収集クラス??」

「??どうしたんだよ??」

情報収集クラスと言う言葉に敏感に反応した風牙を変に思った正史が風牙の方を向く。

「いや、情報収集クラスには……。」

風牙が何か言いかけた時だった。

「風牙!!!!」

後ろから声がかかった。

「何してるのよ!!!入学式遅刻なんかして!!!!」

1人の女の子が風牙に近寄って来る。

「あれほど遅れるなって言ったのにっ!!!!」

「わ、悪い悪い。できれば俺じゃなくて作者に……。」

弁解の言葉を言う風牙を正史が引っ張った。

「おい!!!!誰なんだよ!?!こんな可愛い彼女がいたのか!?!」

「ち、違どうぞ!!!彼女じゃねえ。」

「あれ??風牙のお友達??珍しいじゃん。」

何が珍しいんだよと言う風牙のセリフをスルーして女の子は自己紹介をした。

「柊香澄です。一応、風牙の幼馴染みやってます。以後御見仕切りおきを♪」

少し首を傾げて自己紹介をする香澄に正史は自分も自己紹介をする。

「忠岡正史です。よろしく。」

「正史くんかあ。まあよろしくね。」

正史が自己紹介終わった瞬間に後ろから1人の女の子が走って来た。

「何!?!まさか香澄早速逆ナン!?!」

「違うわよ!!!これが私の幼馴染みでこっちは幼馴染みの友達。」

「え!?!例の!?!きゃー!!!!マジでかっこいいじゃん。あ、私、山仲遙って言います。よろしくねえ。」

「東武風牙です。よろしく。」

テンションが高い女の子に少し押され気味の男の子2人。

「それよりさ、早く寮行かないと部屋なくなるらしいよ!!!」

「嘘!?!じゃあ急がなきゃ!!! あ、じゃあね風牙。また明日でも会お。」

そう言い残して香澄と遙は走って行った。

「……………」

「……………」

「俺達も帰るか……………」

「ああ…………。けっこう疲れたしな。」

そう言う事で風牙と正史は歩いて寮に帰り始めた。

第3話

風牙と正史は寮に着くと2人そろって溜め息をついた。

「また上がるのかよ……。」

「……お前のせいだからな。」

明らかに風牙のせいである30階までの階段を2人は足を引きずりながら歩いて行った。

「そう言えばさ、晩飯どうすんだ??」

「部屋にキッチンが付いてたはずだけど。」

「自炊!?!マジかよ。香澄でも読んで来たらよかったぜ。」

「そうだ!!それだよ。柊さんに付いて詳しく教えろ。」

いきなり正史が風牙にくっついてかかる。

「何だよ??惚れたのか??」

「違う。でも可愛い女の子には興味ある。」

風牙はふくんと頷いてから質問を質問で返した。

「何が知りたいんだ??」

「だからどう言う関係だよ??」

「幼馴染みって言っただろ。」

「それを詳しく。」

風牙はどう説明するか迷ったらしく、黙り込んで頭を掻いた。

「どんなって言ってもただの幼馴染みだぜ??小さい頃から母親同士が仲良くて、ずっと一緒にいたんだよ。」

「くっそ。美少女の恋の相手は大体幼馴染みって相場が決まっているからなあ。」

正史がかなり偏った偏見を見せたところで風牙がある事に気付いた。

「あれ??ここって30階だよな??」

「??ああ。ちゃんと上がって来たからな。」

「今、正史の部屋の隣に誰か入ったぜ??」

「へえ。風牙の他にも30階を選ぶ馬鹿はいるんだ。」

「……………」

風牙にささやかな皮肉攻撃をかまして正史は風牙が人が入ったと言う部屋をノックする。

「すみませ〜ん。誰か……。」

正史のセリフが最後まで言い終わらない内にドアは開いた。

「……………何だ??」

「あ、えっと、隣に住んでる忠岡正史って言うんだ。あんたここに住むんだろ??」

「ちっ……。誰かいたのか……。」

僅かだが小さい声で文句を言ったのを風牙は聞き逃さなかった。

「ちよ〜と待てよ。俺達がいちゃまずいのかよ!??」

「ああ。馴れ合うのは嫌いだからな。」

「……………」

一瞬で粉碎。

これ以上何も言うことは無いと思ったのか、ボタンとドアを閉めてしまった。

「……………なんなんだよあいつ。」

「変わった奴だな。」

正史は干渉しても意味が無いと悟ったのか大して興味を示さなかったが、風牙はかなり興味を示した。

その興味の9割は怒りで構築されていたけど……。

それから2人は悪戦苦闘を繰り返してやっと晩ご飯にありついた。

「正史って料理下手な人だったんだな。」

「風牙もだろ。」

2人は文句を言い合いながら晩ご飯を食べた。

次の日は正史のお陰で風牙は遅刻せずに済んだ。

なんとかギリギリに教室に滑り込み、空いている席に座る。

「あ、あいつ1番前に座ってやがる。」

ご近所さんを見付けて風牙の怒りのパラメーターが上がる。

「みんな席に座れ。」

ちよーどいいタイミングで斎藤が入って来たので風牙は怒りをぶつける対象がなくなってしまった。

「お前達の授業は殆んど俺が受け持つ。勿論時間ごとに助手の先生は変わるがな。」

斎藤はそう言って教室を見渡す。

20人ではいるには広い教室だ。

「まず点呼を始める。……やっぱりどうみても全員出席だから辞めとく。」

どうやら斎藤はかなり適当な先生のようにだ。

こんな先生に授業ができるのかと不安になった生徒もいたはずだ。

「じゃあ早速午前の授業に入るぞ。」

黒征学園の授業は午前と午後の2時間だけだ。

間にひる休みをはさんでいる。

「まず始めに、暗殺者自身に必要な不可欠なものはなんだと思う??

えーじゃあそこのお前。」

「えっと……殺傷能力です。」

指名された生徒が答える。

「殺傷能力か。まあそれも大切だが……。じゃあこう言う聞き方をしよう。」

そう言って斎藤は違う質問の仕方をした。

「暗殺成功とはどう言う事だ??じゃあ……お前。」

今度はクラスで2人いる女の子の内の1人が当てられた。

「え……ターゲットを殺すこと……かな??」

「まあそれも大切だな。しかしもっと大切なのは気付かれないって事だ。」

「気付かれなければ何らかの形で失敗しても次の作者に移れる。さて、じゃあこれを踏まえて暗殺者に不可欠なものはなんだ??

えーじゃあ次は……お前。」

斎藤はそう言って正史を指差した。

「ネタ入れるって。ウケ狙えよ。」

隣から風牙が余計な事を言う。

「踏まえて……じゃあ機動力……かな??」

「そう。それだ、機動力。それが1番大事になってくるんだ。今日はその辺の事について講義する。実習はないが寝るな。」

そう言って斎藤は話をし始めた。

第4話

それから昼休みが始まる1時まで斎藤は喋り続けた。

その間に何人かが睡眠と言う現実逃避を行ったが斎藤によって現実に戻されてしまった。

ちなみに風牙も正史も現実逃避をした内の1人だった。

「よし。じゃあ午後からはまた違う授業をするから遅れずに教室にいること。遅刻者にはペナルティを与える。」

斎藤はそう言いながら風牙の方をちらっと見た。

正史はそれに気付いたようだが風牙は寝起きの顔でぼーとしている。

「じゃあ解散。」

斎藤のひとこで次々と生徒が教室を出ていく。

するといきなり今まで半分寝ていた風牙がバツと起き上がった。

「おい！！こら！！てめえ！！！！」

そう叫びながら前の席に走っていく。

どうやら授業が始まる前から溜っていたフラストレーションを発散したいようだ。

「ちよ、な、何するんだよ！？」

風牙はいきなり正史の隣人に後ろからヘッドロックをかけた。

「正史！！飯行こうぜ飯！！」

「はいはい。」

正史は隣人をヘッドロックしながら引きずっていく風牙の後に続いた。

「お、おい！！やめろって！！」

と言う声が廊下中に響いたが風牙は完全無視だった。

「あ、そう言えばこいつの名前って何だっけ??」

「さあ?? 斎藤の奴点呼もしねえし当てるときでさえ名前を呼ばないからな。」

ヘッドロックをかけられている本人を無視して2人は話を進める。

「名前を言うから離せ!!」

風牙のヘッドロックに耐えかねたのか風牙の腕の中で呟いた。

「……………まあいいや。じゃあ教えろよ。」

何がまあいいのかは全く謎だがとにかく風牙はヘッドロックを解いた。

「俺は中島晴樹だ。」

そう言って晴樹は立ち去ろうとする。

「待てって!! ちょっと待てよ!!!!」

「……………まだ何かあるのか??」

「昼飯一緒に食べようぜ??」

「断る。」

即答した。

「拒否権なし。」

風牙はそう言ってまたヘッドロックをかける。

「ちょ、また………わかったわかった。だから離せ!!」

風牙のせいで一緒に食べたくもない相手と昼ご飯を食べるハメになった晴樹であった。

「あ!! 風牙発見!!」

3人で丸いテーブルを囲んでいると香澄と遙が近寄って来た。

「風牙くん!!」

遙は手を振りながらやって来て風牙の右隣に座る。

香澄はその後からやって来て風牙の左隣に座った。

正史と晴樹が意味深の視線が風牙に突き刺さる。

「あれ?? また友達増えてるじゃん??」

「そう言う友達いないみたいだからやめろよ。ちなみにそいつは中島晴樹って言うんだ。」

へえ〜と頷く香澄と遙、あんまり興味はないようだ。

それから5人（晴樹はあまり喋らなかったが）で喋っていると香澄のクラスメイトが来た。

「香澄〜。遙〜。そろそろ戻らないとマズいよ。」

「あ、ほんとだ。早くしないと。じゃあまたね風牙くん。」

遙はそう言って食器を片付けに行った。

「じゃあ私もそろそろ帰ろ。」

香澄も立ち上がる。

「あ、そうだ。風牙、今日の夜暇?？」

「?? ああ。別に大して用事はないけど??」

風牙は香澄のよくわからない質問に疑問を抱きながらも答える。

「じゃあ電話して。」

はい、じゃあこれと電話番号を書いた紙を渡して香澄は立ち去って行った。

「いやあ。モテる男は辛いねえ。」

風牙が言った瞬間正史と晴樹に睨まれた。

「じ、冗談冗談。」

弁解する風牙を無視して正史と晴樹は立ち上がる。

「おい!!! ちょっと待てって!!!!」

さらに無視。

「あいつらにこう言う系の冗談は禁止か!？」

あくまで独り言を言う風牙は先々歩いて行く2人を追いかけて行った。

午後からの授業は暗殺者の使う主な武具を勉強した。

プリントを渡されて、その1つ1つの説明を聞いたのだった。

午前中と違って生徒にとってかなり興味のある内容だったので誰も寝ていなかった。

暗殺者の武具は主に標的を殺傷するための武器、情報家と連絡を取り合える通信機とに分かれる。

今回は武器についての説明だった。

武器は主に殺傷力重視、機動力重視、生存率重視の3つに分かれる。

殺傷力重視はその名の通り標的を殺す事を第1に考えた武器、機動力重視の武器は大して殺傷力はないが見つからずに行動できるように小型の武器が多い、生存率重視はとにかく生存する事を1番に考えて作られている。

暗殺者にいくら機動力が大事だからと言って標的を殺せない武器を持っていても仕方ないので、普通は殺傷力重視の武器を使う暗殺者が多い。

「明日は自分がどんな武器を使うのかを決める。明日までによく考えて来るように。では解散。」

時計の針が5時を過ぎた時に斎藤は言った。

「風牙はどんな武器にするつもり??」

やっと授業が終わってホッとした顔の風牙に正史が聞く。

「俺?? やっぱ機動力重視かな?? 正史は??」

「俺は殺傷力重視だ。」

「ふゝん。じゃあ晴樹は??」

風牙が自分の右隣に座っている晴樹（風牙が無理矢理席を変えた）に聞く。

「……………殺傷力。」

「やっぱりそうかぁ。定石だよなぁ。」

「標的を殺せなければ意味がない。」

「俺もそう思う。」

殺傷力重視の武器を選ぼうとしている2人が言う。

「まあいいや。それより早く帰ろうぜ。」

「俺は一緒には……………」

「一緒に帰ろうぜ!!!」

と言う事で3人（1人は嫌々）は帰路に着いた。

第5話

寮に付いた3人は早速晩ご飯の支度を始めた（またしても晴樹は無理矢理）。

何気に晴樹が料理が上手いと言う事がわかったので風牙と正史は胸を撫で下ろした。

2人とは対照的に晴樹はこれからも風牙と正史の食事の大部分を受け持つ事になるであろう事実にかなり憂鬱だった。

風牙に強制はされているが、最後にはきちんと自分の意思で風牙達と一緒にいるのだから別に2人の事が嫌いな訳ではなさそうだ。

「そう言えばさ、電話ってどこにあるんだ??」

食事を食べ終りジャンケンで負けた正史が食器洗いをし終えた時に風牙が聞いた。

「……知るか。自分で探せ。」

正史は風牙が香澄に電話をする為に電話を探しているのだとわかったからわざと冷たく当たった。

「晴樹は知ってるよな??」

風牙は正史から聞く事を諦めたらしく晴樹に話題を振った。

「もちろん知ってるが、お前には教えない。」

晴樹はさらに冷たかった。

「2人共知ってるって事は部屋のどこかにあるって事だよなあ。」

風牙は独り言を呟く。

「俺はそろそろ戻る……。」

晴樹はそう言って立ち上がった。

「じゃあ俺も戻るかな??」

続いて正史も立ち上がる。

「じゃあなあ。女の子ぐらい紹介してやるからすねるなよ!!」

2人は風牙を一瞬見たが、無言で行った。

「…………さてと。電話でも探すかな??」

実際、探しはじめてから35秒で見付かった。
ベットの近くに設置されていた。

どうして今まで気付かなかったのか分からない。

風牙は黙って電話を手に取り昼間に香澄からもらった紙を見ながら
番号を押した。

「はいもしもし??」

香澄は3コール目で出た。

反応が早かったのは電話をずっと待っていたからだろう。

「お約束通り東武風牙が電話をかけました。」

風牙は微妙な敬語で電話をかけたと言言した。

「風牙!? やっとかけて来てくれたあ。香澄ちゃんはけっこう待ち
ました。」

雁原優華が言いそうな言葉を香澄は言う。

「で、なんか用あんのか??」

「うわあ。冷たいっ!!! 幼馴染みで可愛い女の子に対してその態
度はないでしょ??」

「はいはい。そうでした。イゴ、キオツケマス。」

棒読み。

「……理由無きや電話しちゃダメ??」

「……別にそんな事ねえよ。ホームシックにでもなったのか??」

ちよっとシリアスモードが入った香澄に風牙は優しい言葉（本人は
そう思っているが実は普通）をかけた。

「んゝ。まあそお言う事でいいや。学校で会っても話す時間あんま
しないしさ。って事はなかなか出番が無いって事だからそれはマズ
いから電話で登場しようって事。」

「……………」

「だからこれから毎週土曜日に電話しよ??」

「なんで土曜日なんだよ?? どうせなら休みの日曜日の方が良くね
??」

「土曜日だったら次の日が休みだから時間気にせず喋れるじゃん。」

風牙は思わず成程と思ってしまった。

「まあいいけど。」

「じゃあ何喋ろっかなあ??んゝ。学校慣れた??」

「まだ2日目だぜ??」

「それもそっか。でも2日目にしては私のクラスで東武風牙ファンクラブが出来つつあるけど。」

「は??何でだよ??」

「遙が教室で騒ぐんだもん。『香澄の幼馴染マジカッコいいゝ』って。」

「いやあ。遙ちゃんわかってんなあ。」

「…………。」

「お前も正史と晴樹のアイドルだぜ??正史も晴樹も遙ちゃんみたいに騒がないから他の連中はお前の事知らないけど。」

「とにかく風牙のお陰で大変なの!!」

「何が??」

「皆にいろいろ聞かれるの。『風牙くんって付き合ってるの??』

『好きな子のタイプは??』『香澄ってホントに幼馴染みって言うだけの関係??』みたいな感じで。」

「カッコいい幼馴染みを持つと大変だなあ。」

「はいはい。大変ですよ。それより聞きたい事あるんだけど。」

「何でも聞けよ。」

「今、彼女いるの??」

「いない。」

「……ホント??」

「嘘ついてどうすんだよ??」

「ふゝん。いないんだ。」

「……何だよ??」

「2、3人いると思ったのに。」

どうやら香澄は風牙をかなりの女垂らしと思っている様だ。

「そんなハズねえだろ。」

「はいはい。そうでしたね。じゃあどんな女の子がタイプなの??」
「俺の事きちんとわかってて、俺の事を真剣に好いてくれるんだっ
たらそれでいいかな??」

風牙はやや意識してカッコいい答えを言った。

「じゃあ難しいかもね。風牙の事理解できる子とかなかないない
でしょ??」

「まあな。」

2人の間に微妙な沈黙が流れる。

「おまえはどうなんだよ??」

「私??別に今まで通り。」

ちなみに香澄は今まで付き合った事はないがファーストキスは終わ
らせていると言う複雑な女の子だ。

「へえ。まだ処女か。」

「普通です。」

「好きな子とかは??」

「うーん。気になる子はいるよ。」

「マジで!?誰だよ??その子は気付いてんの??」

「絶対気付いてない。たぶん気付くまでにかなり時間がかかると思
うよ。」

「……鈍感な奴だな。そんな奴やめとけて。」

「言える立場じゃないでしょ。かなり鈍感なくせに。」

風牙は真剣に自分が鈍感だとは思っていないらしい。

「はいはい。じゃあもう寝るから切るぞ。」

「おやすみ。」

香澄との電話を終わらせた風牙はそのまま寝ようとしたが、風呂に
入っていないのを思い出したらしく風呂に入った。

「さてと、明日は確か武器を決めなきゃなんねーんだったな……。」

風牙はそう呟いて深い眠りに落ちた。

第6話

次の日、朝から殺し屋、暗殺者クラスを含む4つのクラスでは武器の話題しか拳がっていなかった。

情報収集クラスも事後処理クラスも一応は戦闘訓練を受けるので武器を選らばないといけないのだ。

正史は結局機動力重視の武器にするらしく晴樹は昨日と同じで戦闘力重視の武器にするらしい。

斎藤がいつも通り点呼のない朝礼を済ますと今日1日の説明を始めた。

「今日は午前も午後もない。武器が決まった奴から今日の授業は終わりだ。」

この言葉にクラス全員から歓喜の声が挙がる。

「では説明を始める。まずはお前達が考えて来たであろう希望の武器を聞く。それからその武器を使って簡単な試験を受けてもらう。

その試験に合格すれば今日は帰ってもいい。」

要するに、武器との相性を調べるテストらしい。

「希望の武器通りいかなかったらどうなるんだろな??」

「さあ?? ややこしそうだから希望通りいつてくれないと困るよなあ。」

晴樹を挟んで座っている風牙が正史に話し掛ける。

「で、具体的にどんな武器にするつもりなんだよ??」

「俺は3段ロッドみたいなのにするつもり。昨日調べたらそんなん使ってる現役の暗殺者がいるらしくてさ。」

正史はどうやら昨日の夜、風牙が香澄といちゃいちゃしている間にいろいろ調べたらしい。

「晴樹は??」

「俺は刀にするつもりだ。」

「へえー刀かあ。……ありきたりだなあ。」

この頃風牙は晴樹をからかうのにハマったらしくいつもちょっかいを出しては睨まれている。

「……そういうお前はどうかんだ??」

「俺はナイフかな??」

「ナイフ!? それだけ??」

「ああ。完璧な機動力重視ってやつ??」

確かにナイフだけを使うとかなり機動力が上がるのだが、殺傷能力があまりにも欠ける為、現在にナイフだけを使って暗殺を実行する者はいない。

それから30分後に希望武器調査表を渡された。

調査表を書き終わった生徒からシュミレーション室に移動するらしい。

調査表にはかなり詳しく武器の形や長さなどを書かないといけなくて、自分が思い描いている形を絵にも表さなくてはいけなかった。

しかし風牙は

「ナイフだったらどんなんでもいい。」

と言っていち早くシュミレーション室に行った。

「何だこれ??」

シュミレーション室にいた先生のほとんどが風牙の調査表を見て言った。

「東武……俺は詳しく書けと言ったはずだが??」

斎藤が頭を掻きながら調査表を風牙に渡す。

「いやあ。でもマジで書いてある通りっすから。」

ちなみに風牙が調査表に書いた言葉は『一般的にナイフと呼ばれるものなら何でも可』だけだった。

あとは何1つ書いていない。

「ここで決まった武器は生涯使う事になるんですよ??」

「はい。わかってます。」

「……………」

「すみません。先生方、ちょっと。」

斎藤はそう言ってその場にいた先生を集める。

「ああ言ってるんですし、一度試験を受けさせましょう。一度落ちれば真剣に考えるでしょう。」

斎藤以外の先生もこれで一応試してみると言う事で決まった。

「よし、じゃあそこに入れ。指示は随時出していくからな。」

風牙は斎藤の言う通りに部屋に設置されてあるカプセルみたいな機械に入った。

「シュミレート開始。」

と言う斎藤の言葉と共に周りが歪んだ。

「…………。さすが最新の機械だよなあ。感覚までリアルだ。」

自分の体を触りながら感動している風牙にどこからか声がかかる。

「今からお前が行うテストは簡単な実戦テストだ。お前の前に強さは中の下ぐらいのターゲットを出すからそいつを倒せ。」

風牙は頭の中に響く斎藤の声にまたもや感動する。

風牙が感動の余韻に浸っていると目の前にいきなり人影が現れた。

風牙はとっさに戦闘体制をとる。

「じゃあお前の武器は……ナイフだともいいらしいからこれな。」

頭の中でそう声が響くと同時にポケットの中が重くなった。

「…………バタフライナイフかよ。」

ちなみに敵は防具完全装備な上、槍を持っている。

「斎藤のやろお。生徒いじめか!!」

などと呟きながらも風牙はバタフライナイフを構える。

するといきなり相手が襲いかかって来た。

ただ槍を構えて突き進む一番オールドソックスな突きだ。

風牙はそれを軽くかわし相手の右脇腹に蹴りを放つ。

「痛ってえ!!!」

風牙の蹴りは澄んだ音と共にはねかえされる。

「痛みまでリアルなのかよ。」

そう言いつつ、風牙は敵との距離を詰める。

右に重心を移動させた瞬間に左に重心を移動させると言う基本のフエイクを入れながら今度は首筋を狙ってナイフで突き上げる。

そのナイフが届く寸前に頭上から槍が突き下ろされる。

「うわっ!! あぶね、あぶね。」

風牙は素早く相手との距離をとる。

「ったく……。バタフライナイフで槍に歯向かうとかただの馬鹿だろ。暗殺ならまだしも面と向かっての殺し合いだぜ??」

恐らくは聞こえてるであろう斎藤に文句を言いながら風牙は右足を少し後ろにずらす。

次の瞬間に風牙は地面を蹴った。

一気に距離を詰める。

右にきた風牙の攻撃を防ぐため右側を防御した敵を見て風牙は防御をくぐり抜けて敵の後ろに周る。

「これで終わりっ!!!」

そういいながら風牙は兜と鎧の間の隙間にバタフライナイフを突き刺す。

ナイフを刺された敵は声も挙げずに倒れた。

普通は声も出すが、初めてでショックがあるといけなので武器認証試験では音声は切つてあるらしい。

そんな事を知るよしもなく風牙は声を挙げる。

「うわっ。声無かったら気持ち悪っ!!!」

思ったままの感想を言ったところで頭に斎藤の声が響いた。

「……シュミレート終了。」

その言葉と共に景色が揺れて風牙は元の部屋に戻された。

第7話（前書き）

長い間小説を止めてしまいました。
すみません。

指を骨折して携帯が打てなかったんです。
でもその間に話をかなり考えましたのでこれからはできるだけ早めに更新したいと思っています。

第7話

風牙がシュミレートを終えてシュミレーション室に戻って来てから一悶着あった。

教師陣はまさかバタフライナイフで合格するとは思っていなかったらしく風牙を無視して相談を始めた。

「東武、お前は納得したのか??」

話がまとまったらしく、斎藤が風牙に話しかける。

「納得?? 俺は元からいろんな事承知でナイフ選んだんっすけど。」
って事で風牙合格になった。

正史も晴樹も自分の希望通りに武器になったらしい。

早々に武器認証試験を合格した3人は特にする事がないので寮に帰った。

「それにしてもまさかバタフライナイフで受かるとはなあ。」

誘っても来ない晴樹の部屋に押し掛けた正史が言う。

「いやあ。やっぱり天才は違うんだよ。」

「天才と変態は紙一重だけだな。」

「……それは俺が変態だって言いたいのか??」

すっかり天狗になっている風牙に晴樹は手厳しくコメントを出す。

「でもマジでナイフだけでやっていくつもりなのか??」

「違う武器使おうと思ったらまた試験受けなきゃなんねえんだぞ??
それに足りない攻撃力は体術でカバーするからさ。」

「ま、お前がそれでいいならいいけどな。」

大して危機感を感じていない風牙に晴樹はおろか正史までも武器については聞こうとしなくなった。

「ってか今日の料理担当者誰??」

「……俺だ。」

3人が部屋に帰って来てまずやった事は料理担当者を決める事だった。

晴樹が

「毎日料理をするのは嫌だ。交代制にでもしないとお前達の分は作らない。」

と言い張るので交代制にしたのだ。

記念すべき第一回目は晴樹が担当する事になった。

「おお。晴樹君でしたか。それはそれは。」

むろん風牙は分かっていた聞いて聞いたのだ。

本日3回目の同じ嫌味だった。

「もうやめとけて。そのネタは飽きた。」

正史にも止める気は全くない。

「だって嫌味って分かってて返事する晴樹がかわいいから。」

そう言った直後に風牙は晴樹の投げたテレビのチャンネルによって後ろに退け反った。

「痛ってえ。何すん：！！」

言い終わらない内に第2打。

やっと思ひたのか風牙は大人しくなった。

「それより明日から何するんだろうな？？」

風牙を全く無視して正史が会話を進める。

何気に一番冷たいのは正史かもしれない。

「明日から何週間かは殺し屋クラスと合同の戦闘力の授業だったはず。」

もちろん一番真面目な晴樹の言葉。

「ふーん。まあそんなもんか。」

正史が納得した所で風牙が口を挟んだ。

「それより早く晩飯の準備しろよ。料理担当者さん。」

晴樹は風牙を睨んで立ち上がった。

「そう言えばよ。正史の3段ロッドだっけ？？殺傷能力で言えばナイフと変わらななくね？？」

台所に向かう晴樹を尻目に風牙は話題を変える。

「正確には高圧電流付き3段ロッドって言うんだぜ？？」

つまり正史の武器は、普通の3段ロッドに高圧電流が流れる様にしたものらしい。

中に高圧電流装置を入れる分耐久性は低くなるらしいが殺傷能力はかなり上昇する。

「なるほど。それは考えたなあ。」

「普通はそんなくらい考えて武器決めるんだよ。風牙が変なんだ。」

「いつの時代も天才は始め変態扱いされるからなあ。まあ後々俺の素晴らしさが認められる時が来るからそれまで我慢だな。」

「大抵の場合その本人が死んでから認められるぞ。」

風牙の独り言に正史は手厳しいコメントを出す。

「お前ら少しは手伝え。」

台所から晴樹が呼ぶ声があったので機嫌を損ねて不味い料理を作られない様に2人は素直に台所へ向かった。

第8話

次の日から晴樹の言った通り殺し屋クラスとの合同授業が始まった。「え」と。毎年恒例なんだが、暗殺者クラスと殺し屋クラスとの間で喧嘩が勃発する。決して負けないように。」

斎藤は喧嘩を泊めようともせず逆にそそのかしている様だ。

どうやら先生間でも暗殺者クラスと殺し屋クラスは仲が悪いらしい。「午前の授業は第3闘技場でやるから遅れないように。じゃあホームルーム終わり。」

そう言うとき斎藤はいつも通り出席も取らずに教室を出ていった。

「第3闘技場ってどこ!？」

「第2闘技場と第4闘技場の隣だ。」

「……………」

と言うなんとも仲良く、微笑ましい会話を交しながら3人は第3闘技場へ向かった。

闘技場へ行くともうすでに殺し屋クラスが着いていた。(何気に斎藤も)

「よし。じゃあ整列しろよお。」

ピリピリした空気を物ともせず斎藤は呑気な声で整列を呼び掛ける。

「はい。じゃあ説明を始める。まず始めに言っとくが、これから最低1ヶ月は武器を使わない。武器がナイフだろうが刀だろうが武術から始める。」

武術の合格を認定された人から武器の訓練に移るらしい。

「ちなみに合格、不合格は俺の独断と偏見で決めるからよろしく。」
なんとも不吉な宣言をした斎藤の合図で全員が闘技場に広がった。
それから数時間に渡って暗殺者クラスは暗殺者クラスで、殺し屋クラスは殺し屋クラスで各々の担任に指導をされた。

「あゝ。疲れたゝ。」

昼休み教室でうなだれている風牙が呟く。

「けっこう疲れるもんだよなあ。」

正史が風牙に同意をする。

「ってか合格、不合格の決め方が不満。」

「お前は絶対最後の方まで残されそうだよな。」

「……………そう言う予言はしない事。」

「……………最後まで残されとけ。」

「何か言ったか!？」

不毛な会話が続きそうだと思ったらしく正史が無理矢理止めた。

「午後の授業って何だっけ??」

「えゝと。確か……………」

「現代情勢だ。」

「……………先に言うなよ。」

現代情勢の授業はその名の通り現代の情勢を学ぶ授業だ。

近代史と並んで睡眠率が高い授業らしい。

「晴樹!! 今日、帰ったらノート見せて!!!!」

「あ!!! 俺も!!!!」

どうやら風牙も正史も寝る気まんまんな様だ。

「……………起きとけ。」

晴樹がまともな意見を出した所でチャイムが鳴った。

現代の情勢は世界の中心であるワイクランドの世界平和維持隊が表面上の平和を保ってはいる。

しかし、維持隊の圧力により露見はしないものの裏の世界では戦時中と大して変わらない行為が行われている。

その行為を阻止し、本当の平和を導くのがお前達だ。

と斎藤が説明し始めた時にはクラスの30パーセントが睡眠学習と言う奇跡の学習を始めていた。

しかし斎藤は起こそうとはせず、自分も眠そうに説明を続ける。風牙は我慢できずに寝ようと決心した瞬間横から肩を叩かれた。横を向くと正史が紙を渡してきた。

（放課後一年の暗殺者クラスは第4闘技場使っていらいから行こうぜ。）

多分正史の向こうに座っている晴樹情報だろう。

内容を理解した風牙は正史に向かって親指を上げた。

ちなみに第1闘技場は二年殺し屋クラス、第2闘技場は二年暗殺者クラス、第3闘技場は一年殺し屋クラスがと言う割り当てらしい。それからの数時間、風牙は放課後が楽しみでワクワクしていた為、現代情勢の時間に一睡もしないと言う偉業を成し遂げた。

第9話

斎藤が現代情勢の授業を終え、そのまま解散を言い渡した瞬間に風牙と正史は晴樹を引っ張って教室から出ていった。クラス全員の好奇心に満ちた視線が後を追う。

「よっしゃあ！！！！一番乗り！！」

風牙は半分蹴破る様な形で闘技場のドアを開けた。

「…………い、痛いから離せ。」

襟首を掴まれて引っ張られていた晴樹が言う。

「今思ったら早く来ても三人しかいないんだよなあ。」

正史は今更気付いた様だ。

「まあいいじゃん。待ってようぜ。」

ちなみに授業でやる武術は戦闘技術の類ではない。

気配の消し方、後方からの攻撃など正確には暗殺者に必要な暗殺技術を習うのだ。

黒征学院は全国からのよりすぐりの集まりなので格闘技術の類はすでにあるていど持っているのだ。

正史は拳法、晴樹は武器が剣なので武術はほとんど関係ない。

「風牙はどうなんだよ??」

「ん??俺??俺は我流だぜ、我流。」

「……ウソはいい、ウソは。」

「マジだって。我流って言えばカッコいいけど実際は喧嘩殺法みたいなもんだからなあ。」

しみじみと呟く風牙に晴樹が突っ込む。

「そんなんで良くこの学校に入れたな。」

「強いからな。」

根拠のない自信を余る程持っている風牙を無視して正史は事実を告げる。

「それより誰も来ないよな。」

実際、3人が来てから30分は経ったが今だに誰もこない。

「……誰も聞いてなかったんだろ。」

「……もっと早く言えよ。誰か誘ってきたのに。」

と言う正史の言葉を最後に沈黙ができた。

「ん〜。じゃあ晴樹は審判してくれよ。正史、模擬戦しようぜ。」

そう言うって3人は無駄に広い闘技場に広がった。

「じゃあルールは無しで。30分一本勝負。始め!!!」

と言う晴樹の掛け声に模擬戦が始まった。

晴樹の掛け声と共に正史は低く構え、踵を少し浮かす。

それに対し、風牙は右足を半歩前に出す。

5秒間の静寂の後、先に動いたのは正史だった。

風牙との距離を一気に詰め、風牙の懐に入る。

そのまま顎に向かってアッパーを繰り出す。

後少しで正史の拳が顎に当たると言うところで風牙は膝蹴りを放つ。

正史はとっさに左腕で防御し、距離をとる。

「零距离から膝蹴りかよ。」

正史は拳法の世界ではありえない攻撃に苦笑いをもらす。

「じゃあ次は俺から行くぜ?」

風牙はその言葉と共に地面を蹴った。

とっさに上段に構える正史を見て風牙はスライディングの要領で正史の足に滑り込む。

「……っ!!!」

予想外の攻撃に思わず足を払われた正史だが、倒れると共に風牙の顔面向かって肘を落とす。

「うわっ!!!」

風牙はそれを間一髪で避け、足を振り上げて正史を蹴り飛ばす。起き上がったばかりの風牙に正史はハイキックを与える。

風牙は正史のハイキックを腕でガードし、その足を伝って回し蹴りを正史の脇腹に放つ。

片足を取られたままの正史はとっさに付き出したままの右足で風牙の左足を払う。

体勢を崩された風牙はそのまま前回りの要領で正史に踵落としを繰り出す。

「……っ!!」

またもや予想外の攻撃に正史は一旦引く。

「ったく。訳分かんねえ攻撃ばっかすんなよ。」

風牙の攻撃は基本の体勢や型を無視しているので少しでも武術に通じているものからすればありえない攻撃となるのだ。

「まあ基本とか全く無視だからな。」

それから2人は一進一退を繰り返し結局勝負が着かないまま30分がたった。

「終わり!!!」

と言う晴樹の言葉と共に2人は倒れ込んだ。

「……っ、疲れた。」

「……。」

2人はもはや喋れないらしい。

「……先に帰っとくからな。」

審判をしていた晴樹は特に疲れた様子もなく、2人を待とうとはせずさっさと帰ってしまった。

2人にはそれを止める気力さえない。

「……これからあの階段登るのかよ。」

「……しかもお前は料理担当だ。」

「……。」

風牙は一瞬帰らない事も考えたが後々の事を考えてやっぱり帰る事にした。

第10話

次の日、風牙と正史は午前の武術の授業をともに受けられなく、斎藤に怒られるわ、クラスメイトに茶化されるわで大変だった。

晴樹がクラスメイトに2人が疲れている理由を説明すると、案の定、全員が放課後に闘技場が解放されている事を知らなかったらしく

「今日こそは行こうぜ。」
と言いつつ合っていた。

「……ちゃんと先生の話聞いとけよな。」

自分も聞いてなかったくせに風牙はぬけぬけと言いつつ。

「ってか俺ら今日も行くの??」

「……………」

無事に午前の授業を終わらして3人は食堂へ行った。

「風牙く〜ん!!!!」

空いている席を探して3人がさまよっていると呼びがかかった。

「ここ空いてるよ。」

遙が周りを気にせずに叫ぶ。

これ以上叫ばれると困るので3人は早足気味で遙の元へ向かった。

「あれ!? 香澄は??」

いつも香澄と一緒にいるはずだが、遙が違う女の子と一緒にいたので風牙が聞いた。

「今、保健室にいるよ。頭痛いって言った。」

「保健室か。」

「あ、行っちゃダメだよ。『香澄が風牙が来たら疲れるから来さないで』って言った。」

「……………」

どっちかと言えば風牙の方が疲れさせられそうだが香澄は自分の方が疲れると思っっているらしい。

「そう言えば情報収集クラスは今何やってんの??」

正史が思い出した様に言う。

「今はパソコンでハッキングとかいろいろ。その名と通り情報収集ね??」

遥は緊張してしまって（理由は不明）何も喋らない友達に話を振る。

「う、うん。」

「へえ。俺達は今武術だよな??」

正史も何も喋らない（無関心）な晴樹に話を振る。

「今度、放課後第3闘技場見に来たら??」

風牙が何気なく誘う。

「行っているの!?じゃあ今度香澄と相談して行ってみる。」

「あ、香澄にお前が来たら疲れるからお前は来なくてもいいぜって言っというて。」

「え。ホントは来て欲しいくせにそう言う事言っちゃだめだよ。」

遥がとても楽しそうに言う。

遥は他人事でも自分の事でもとても嬉しそうに喋れる。

それに対し晴樹は何事にも無関心。

本人は知るよしもないが裏ではクールな晴樹のファンがたくさんいるらしい。「じゃあ私達は香澄の所に行くから。」

そう言って遥は友達と一緒に立ち去った。

「……結局あの子誰だか紹介しなかったな。」

「『うん』しか喋らなかったしな。」

「こっちには一言も喋らなかった奴もいるけど。」

風牙がいつもの様に晴樹をからかう。

「……うるさい。それより早く飯を食いたいな。」

晴樹はこの頃風牙を軽く受け流す事を覚えた様だった。

第11話

風牙が黒征学園に入って早くも3ヶ月か過ぎようとしていた。

その間は大したトラブルやイベントもなく、平凡な日が続いた。

元々実力のある生徒しかいないので3ヶ月と言う期間でもかなりの成長率だ。

暗殺者クラスと情報収集クラスではもうそろそろ合同授業が始まる予定だ。

その為にペアとなる生徒をお互いに決めなければいけない。

今日はその為に暗殺者クラスと情報収集クラスは合同授業だった。

「では、手元にある資料を見てください。」

暗殺者クラスには情報収集クラス、情報収集クラスには暗殺者クラス
の生徒の特徴が書いてある資料を渡して木村が言った。

ちなみに木村とは情報収集クラスの担任だ。

「その資料を見て自分と合いそうな人を見つけて実際に話してみ
て下さい。」

「決まった奴は木村先生に言えよ。」

斎藤が横槍を入れる。

木村は一瞬斎藤を見たが、無視して話を続けた。

「決して容姿などで決めないように。ではどうぞ始めて下さい。」

「フイーリングカップル20対20じゃん。」

風牙が木村の言った事を聞いて感想を漏らす。

「そう言えばそうなるな。」

「……どっちにしろお前は決まってるだろうが。」

「……………」

晴樹の鋭い指摘に風牙は何も言い返さないと言う事はもう決まっ
ているのだろう。

「風牙く〜ん!!」

「……………あいつは何でいつも叫んでるんだ?」

いつも通り叫びながら走って来る遙を見て風牙はつぶやく。

「香澄とペア組むってホントなの!？」

「うん。ホント。」

風牙は当たり前前の事だと言わんばかりに頷く。

「だから言ったじゃん。」

遙に遅れてやって来た香澄が言う。

「うゝ。抜け駆けはズルい!!! いつ決めたのよお。」

「昨日の夜電話で♪♪」

唸る遙に正史が話し掛けた。

「俺とかいいんじゃないの??」

「うゝ。世の中には妥協も必要かぁ。」

「妥協ってなんだよ!!!」

と言う事でめでたく(?)二組が決まった。

「じゃあ早く言いに行こおよ。あ、でも晴樹くんまだだね。」

香澄が風牙の腕を引っ張りながら言う。

「俺はいい…。先に行け。」

「うわっ!!! 正史が遙ちゃん取るからすねたじゃねえか!!!」

「何だよ!!! 女の子ならいっぱいいるだろ。」

風牙と正史が不毛な言い争いをしてる間に晴樹はどこかに行ってしまった。

「マジですねちゃったのかな?？」

「違うと思うよ。さっきからずっと資料見てたし。気になる子いたんじゃない??」

香澄と遙はまっしな意見を出す。

「とにかく言いに行こ。」と言う遙の一言で4人はその場を去った。

第12話

晴樹のペアが決まったのは風牙達が報告をし終わってから15分ぐらい後だった。

「お、晴樹決まったみたいじゃん。」

「……あれって男だよな?」晴樹の隣にいる生徒を見て正史が呟く。

「あいつってそんな趣味だった?」

「でも一組だけ男のペアができるはず。」

暗殺者クラスは男子18人2人、情報収集クラスは男子3人17人なので男子と女子でペアになると1つだけ男子のペアができるのだ。

「あれって東雄平くんだよな?」

「あ、ホントだ。晴樹くんが選ぶような相手だね。」

香澄と遥は何故か納得している。

「知ってんの?」

「当たり前じゃん。同じクラスだよ?」

「どんな奴だよ?」

「性格はあんましかなあ。寡黙だし一緒にいても楽しくない。」

「そんな事聞いてんじゃねえよ。」

風牙と香澄が夫婦漫才をしている間に遥が説明をし始めた。

「技術はウチのクラスで断トツで1番。パソコンに関してはプロ並の知識持つてるしね。」

「なるほど……晴樹が選ぶそうだ。」

正史は納得できたみたいだ。

「風牙と違って実力で決めたんだな。」

正史がぼそつと言った言葉を風牙は見逃さなかった。

「どう言う意味だよ!」

「そうだよ!! 私に実力ないみたいじゃん。」

香澄も不満を示す。

そこに晴樹が戻って来た。

「あれ??? いとしい雄平くんはどうしたんデスか??」

早速風牙がちょっかいをかける。

「……………」

……無視。

「ねえ。午後から何すんの??」

遙がいきなり話題を変えた。

「シュミレートだ。」

この中で一番しつかりしているのは晴樹らしい。

「シュミレートかあ。じゃあ俺と香澄の初めての共同作業って奴?」

風牙が香澄にからかう視線を向ける。

「よく言うよ。手繋いだ事もあるし、一緒にお風呂もあるじゃん。」

「……………」

(正史)

「……………」

(遙)

「……………」

(晴樹)

香澄の言葉に空気が氷ついた。

「あゝあ。変な勘違いしたじゃねえか。」

「ち、違う!!! 小さい時だって!!!! 風牙も黙ってないで何か言
ってよ!!!!」

別に気にしていない風牙を香澄が叩いた。

「やっぱりかあ。それじゃあ私の入る余地は無いなあ。」 「なんで
嘘ついてんだよ。」

「まあ大体わかってたけどな……。」

3人の言葉を聞いて香澄は肩を落として風牙をにらんだ。

「何だよ??」

「風牙が変な話題振るからだ。」

「俺と恋人がそんなに嫌か?？」

「い、嫌じゃな……。」

桃色の空気が見え始めた時、木村の声が響き渡った。

「全員決まりましたからシュミレーション室に集まって下さい。」

第13話

「では、今からシュミレートの説明を斎藤先生にしてもらいます。よく聞く様に。」

木村はそう言って自分の席に座った。

斎藤はいきなり話題を振られていささか驚いた様だが木村に睨まれてしぶしぶ説明し始めた。

「シュミレートのレベルは暗殺レベル5。一番簡単だ。それを今からやってもらう。以上。」

普段から斎藤の適当な説明を聞いている暗殺者クラスは何も動じなかったが、情報収集クラスは皆適当な説明に驚いた様だ。

「いつもあんな適当なの??」

「ああ。いつも通り。」

遥は驚いて正史に小声で話しかける。

普段木村の真面目な説明を聞いているからなおさらだろう。

「名前を呼ばれたペアからシュミレートします。終われば帰ってよろしい。任務内容はシュミレート内で知らせます。」

たまりかねた木村が補足説明をする。

「では、早速始めるぞ。」

一番目に名前を呼ばれたペアがシュミレートの機械に入った。

「どんな任務かな??」

「さあ?? つゝか暗殺レベルって何??」

風牙の素朴な疑問を聞いて香澄は機能停止した。

「し、知らないの?? あんたそれでも暗殺者クラス??」

「……いいから教えろよ。」

「暗殺にはレベルが5クラスあって、1が一番難しいの。5は暗殺じゃなくてスパイみたいな任務内容だから誰かを暗殺するんじゃないと思う。」

へえゝ知らなかった。と暗殺者クラスの風牙わ納得した。

香澄もこれ以上風牙に何を言っても同じだと思ったらしく、それ以上追求せずに黙った。

それから30分後に正史と遙が呼ばれ、30分で帰ってきた。今まで出てきた生徒もそうだったが、正史と遙も険しい顔をしていた。

余裕の顔で出てきた生徒がいらないと言う事は結構難しかったのだらう。

「次、東武、柊ペア。」

正史達がシュミレーション室を出て行ってから10分経ってから風牙と香澄は名前を呼ばれた。

風牙は晴樹に向かって片目をつぶり、香澄は自分の友達に笑顔を見せた。

「では、シュミレート開始。」

木村の声と共に2人はシュミレートした。

第14話

風牙は事務室の様な所に立っていた。

耳にはイヤホン型通信機が付いている。

任務内容や現在状況は香澄が今調べているはずだ。

ボーっとしていても意味が無いので風牙は装備チェックを始めた。

武器はバタフライナイフとコンバットナイフだった。

「……また嫌がらせかよ。斎藤のやろお。」

思いの外ショボい武器に風牙は落胆する。

一通り点検をし終えた風牙は、今度は部屋を調べ始めた。

その頃香澄はワークステーションのキーボードをたたいていた。

香澄はワークステーション一台と任務内容などが書いてあるプリン
トが置かれた部屋に移動したのだ。

もうすでに任務内容把握、目標建造物把握をし終わっていた。

後は風牙を見つけて通信を繋ぐだけなのだから風牙が見つからないのだ。

「あのバカッ！！ドコにいるのよ？？勝手に移動とかしてないでしようね。」

その心配は杞憂に終わるのだが風牙は違った意味でアクションを起
こしていた。

部屋の調査が一段落付いた時風牙は部屋の外に人の気配を感じてド
アの横の壁に背をつけた。

その瞬間にドアが開いて人が入って来た。

特に武装もしていない普通の事務員だった。

風牙は一瞬迷った末、事務員の首に手刀を叩き込んだ。
気絶して力が抜けた事務員を風牙が支える。

「うわっ!! 女じゃん。僕女の人とこんなに密着したの始めて。」
とギャラリーがいないのにボケてみた所で香澄から通信が入った。

「やっと思つけた!! ずっとそこにいた??」

「何だよ。ずっといたぜ。お前の腕が未熟だからめちゃくちや待ったじゃんかよ。」

「……ごめんなさい。じゃあ今から任務内容説明するね。ってかその人なに??」

香澄は風牙のそばの生命反応を見て声を上げる。

「あゝ。大丈夫だから早く説明しろよ。」

香澄の説明によると今回の任務はファイルの奪取だった。
このビルが一番上のファイルを手に入れて無事生還出来れば任務成功らしい。

「頑張って1時間ってトコかな??」

「今まで1時間もシュミレートしてた奴いないだろ??」

「誰も成功してないって事でしょ。」

「じゃあ俺達が最初か。」

風牙が香澄に指示を仰ぐ。

「今風牙は2階にいます。目標は10階。方法としたらエレベーターと階段があるわ。それとその階には事務員しかいません。」
それを聞いた瞬間風牙は部屋から出た。

「ちよっ……!! まだ説明し終わってない!! エレベーターは北東。階段は北西方向。」

自然と香澄の口調が早くなる。

それにもかかわらず風牙は淡々と北東へ向かう。

途中香澄の

「そこ右。」

とか

「北北西に敵。」

と言った事務的な情報が与えられる。

「エレベーターが見えた。敵は??」

「大丈夫。今はいないわ。」

「じゃあ次のに乗る。何かあったら言ってくれ。」

運良く風牙は敵に見付からずにエレベーターに乗り込んだ。

風牙はエレベーター上部の板を外しエレベーターの上へ移動した。

「なんか余裕だな。」

「私のナビゲートのお陰よ??」

「はいはい。そおっスね。感謝してマス。」

棒読み。

「……………」

無視。

変なペアだった。

「これからどうするの??」

「通気孔通って行こうかなって思ってるんだけど??」

「んゝ。まあ妥当かな。通気孔は一旦外に出て左に真っ直ぐ10メ

ートル行けばあるわ。」

香澄は確かに頼りになるナビゲーターだ。

風牙も頭では分かっているらしく素直に聞いている。

エレベーターは4階8階と止まり無人のまま10階へと着いた。

風牙は誰も乗って来なければすぐに飛び出せる様に待ち構えた。

エレベーターのドアが開き、誰も乗って来ないのを確認して風牙は

エレベーターから飛び出た。

第15話

「な……!?!」

風牙が外に出るとそこには武装兵がたくさんいて、風牙を囲んだ。隊長格の兵が右手を上げたと同時に一齐に銃声が聞こえ、周りの風景が歪んだ。

「ミッション失敗。シュミレートを終了します。」

とナビゲートが冷酷にも告げて、風牙と香澄はシュミレーション内から戻って来た。

「これを見て2人で反省会でも開け。」

そう言って斎藤が1枚の紙切れを香澄に渡す。

「次のペアは……。」

木村が生徒の名前を読み上げる。

風牙と香澄は無言でシュミレーション室を出た。

「ナビゲーターの位置把握及び暗殺者の独自判断。」

香澄が紙を見ながら失敗した理由を読み上げる。

「あなたが勝手に気絶させた事務員が通報して侵入がバレたって設定だって。」

「……俺のせいだよ。でもお前の位置把握まダメだったんだろ?」

「うん。始めに風牙探すのが遅れたのと階が変わった時の位置把握かな。」

「……………」

「……………」

これが2人の反省会だった。

お互いを責める訳もなく、ただ自分の犯したミスを自分自信で確かめるだけの反省会。

それから2人は特に喋る事もなくシュミレートをする前に正史と遥と約束した食堂へ向かっていた。

「あ、その空気は香澄達もダメだったんだね??」

食堂に着くなり遥が一番始めに口にした言葉である。

それから4人で今回のシュミレート試験の文句を言い合っていた。
1時間半ぐらいたって晴樹が雄平を連れてやって来た。

「あ、その空気は晴樹くん達もダメだったんだね??」

遥がまた言った。

「いや、成功した。」

それだけ言って2人は席に着く。

「……じゃあ何でそんなテンション低いんだよ?!」

正史がすかさず突っ込む。

「寡黙な2人だからそお見えるだけでしょ??」

その問いに香澄が答える。

「弱冠危ない2人組だよな。」

風牙が茶化しに対し晴樹だけじゃなく雄平まで風牙を睨む。

これにはさすがの風牙も黙った。

「ってかさすがだよな。2人とも。」

「そおそお。すごいじゃん。」

女の子2人はそれぞれ自分のペアに意味ありげな視線を送りつつ晴樹と雄平を誉める。

「くっそ〜!!なんか悔しいな!!」

「……当然の結果だ。」

「うるせえ!!次は負けねえからな。」

と言った風な会話をしている間に遥は居眠りを始めた。

「昨日緊張してあんま寝てないらしいから。」

そう言って香澄は寝惚ける遥を連れて寮へと戻って行った。

「じゃあ俺達も戻るか。」

と言う正史の一言と共に男子陣も寮へと戻って行った。

初めてのシュミレーション以来晴樹と雄平は今まで通り着々と力を

付け学年トップの位置に座り続けた。

正史と遙は2人の息を合わせる事に力を注ぎ、お互いの力を引き出しあえる関係を作った。

香澄は雄平から技術を学んだり、基礎を固めたりと、とにかく努力に努力を重ねていた。

一方風牙は相変わらずだったが、陰では人の10倍を軽く越えるくらいの努力をしていた。

香澄みたいに表だって努力をし、他人に協力をしてもらうと言うタイプではないので朝早く起き、夜は遅くまで鍛練を積んだ。

第16話

それぞれがそれぞれの努力をし、すでに半年がたった。

黒征学園では1年の半から実際に現場で体験する授業が入って来る。今日は現場に出れるか出れないかを試すシュミレート試験の日だ。この日までに情報収集クラスでは通信機の自作を演習に取り入れ、成績上位者は最新型の通信機を作る様にまでなっていた。一方暗殺者クラスは特に変わった授業もなくただ戦闘訓練などを積んだだけだった。

「ではこれよりシュミレート試験を始める。」

と言う斎藤のいつもの適当な説明の後、試験が始まった。

「では第1組目、中島晴樹、東雄平。」

この半年間トップに居座り続けた2人は余裕の表情でシュミレート試験に挑んだ。

それから30分後に2人は戻ってきた。

「中島晴樹、東雄平合格。各自部屋に戻り連絡を待ちなさい。」

晴樹と雄平は木村の声に従いシュミレーション室を出ていった。

それから3組後に正史と遙が呼ばれ、45分後に戻ってきた。

「忠岡正史、山中遙合格。各自部屋に。」

そう言われた2人は部屋を出ていく前に風牙と香澄によって来た。

「お前らも受かって皆で合格祝いのパーティーしようぜ。」

「私でいけたんだから香澄も大丈夫よ。」

それだけ言って2人は出ていった。

「緊張するか??」

風牙が緊張気味の香澄に話し掛ける。

「ちょっと……ね。最新型の通信機も作ったし準備は万端だけど。」

「じゃあ大丈夫さ。この中で一番付き合いが長いペアだぜ??個人

の実力もトップクラス。落ちる理由が見当たらねえよ。」

「うん。……ありがと。」

香澄は安心した表情を見せ、風牙に笑いかけた。

「次、東武風牙、柊香澄。」

木村の声が響く。

「じゃあ行きますか??」

「うん。絶対合格して帰ろおね。」

そう言い合い2人はシュミレート開始の号令を聞いた。

第17話

「任務を始める前に装備を選んで。」

シュミレーション内に木村の声が響く。

「じゃあ白い暗殺服を。」

「白!? めっちゃ目立つじゃん!? 普通黒でしょ??」

大事な試験なのにまさかのサプライズ発言をした風牙に香澄が非難の目を向ける。

「大丈夫だって。誰にも見られねえ自信の表れだから。」

そう言う風牙の目が輝いているのを見て香澄は止める事を諦めた。

「武器はサバイバルナイフ2本と投的ナイフ3本、ミリタリーナイフを1本。」

「じゃあ次は通信機ね。生徒番号1825の通信機をシュミレーション内にダウンロード。装備として使います。」

「どんな通信機なんだ??」

「最新型よ。ちよつと雄平くん到手伝ってもらったけど。映像はコンタクトレンズ型。音声はイヤリング型。ちなみに声に出さなくても伝わります。」

香澄は自分の功績を自慢する様に風牙の方を向く。

「それわすげえなあ。違う事考えてても伝わるのか??」

「全部伝わるよ。任務中にやらしい事は考えないよおに。」

「全部かあ。そりゃあ弱冠不便だ。」

話が違う方向に行ったので木村が止めに入った。

「準備出来たならシュミレーション開始しますがよろしいですか??」

「あ、はい。大丈夫です。」

香澄の返事と共に周りの景色が歪んだ。

シュミレーション始めの独特の感覚がやっと消えた時、風牙は森の

入り口に立っていた。

「何じゃこりゃ??? 森???」

（風牙??? 聞こえる???）

いきなり頭の中に香澄の声が響く。

「うお。すっげー通信機だな。聞こえてるよ。」

（じゃあ今から任務内容を伝えます。その森の中の要塞に今回のターゲットが捕まえられてるの。まず要塞の位置と森の上空からの衛星写真をアップロードします。）

香澄がそう言った瞬間風牙の左目に映像が浮かび上がった。

「これもすげーな。しかも作業早くなったじゃん。」

（いろいろ努力したからね。誉めてくれないの??? それと声には出さなくてもいいわよ。）

（すげえすげえ。ってかこれで伝わってんの???）

風牙はそう思いつつ左目に写る地図を便りに要塞に向かって歩き出す。

（伝わってるわよ。適当に誉めてる事も丸分かりです。ちなみに要塞の出入り口は1つ。周りは5メートルの壁と監視カメラ。どうする???）

（監視カメラを制御できないのか???）

（長くするとバレちゃうから15秒ぐらいならできる。）

（十分だ。南南西のカメラを3台制御してくれ。合図はまたする。）
風牙は香澄にそう伝えると足を速めた。

今回の試験は速さも評価対象になるらしいのでこんな所でゆっくりしている暇はないのだ。

（ターゲットの写真をアップロードするね。）

香澄の言葉と共に女の子の写真が左目に映る。

（へえ。かわいいじゃん。）

（シュミレート内の女の子に惚れない様に。）

（……不便だな。香澄の思ってる事は分かんねえのか???）

（私の方は声に出さないと伝わりません。）

「……………」

風牙は何も思わない様にしつつ道を南西に逸れた。
そこから少し歩いた所に壁が見えた。

（見えたぜ。）

（要塞内部の構造をアップロード。どうやって侵入するの??）

（安心してろって。ワイヤー使って上がる。今から30秒後に監視カメラを制御してくれ。）

（20秒でできるけど??）

（じゃあ15秒だ。）

訳の分からない会話をしつつ15秒が経過した。

（監視カメラ制御まで5、4、3、2、1、制御。）

その瞬間風牙は走り出した壁の手間3メートルで暗殺服に装備されているワイヤーを壁の上部に設置する。

そしてそのままのスピードで壁の1メートル手前まで走り、勢いを殺さずジャンプすると同時にワイヤーを巻く。

ジャンプした勢いとワイヤーの力が合わさって風牙が壁の上部に到着するまで10秒とかからなかった。

（さすが。）

（どうも。ここからの侵入ルートは香澄に任せる。）

（オッケー。じゃあまずそこから北東に10メートル。7メートル地点の建物内に敵がいるから。）

香澄のナビゲートとほとんどタイムラグなしで風牙は動き出す。

（そこから中に入って。すぐ左の部屋の中に入って。左端の通気孔から上に繋がってるから。ターゲットは3階にいます。）

（通気孔内に赤外線装置は??）

（無いわね。この要塞、ハイテク面は心配しなくて大丈夫よ。その代わり護衛が強いかも。）

（その辺は俺の腕の見せどころだろ??）

（期待してるわ。）

（3階に着いたはずだぜ。）

（あゝちょっとマズいかも。通気孔から出る部屋に3人兵隊がいるわ。MR-2持ってる。）

（MR-2??）

（軍用機関銃よ。マズいかも。）

（その部屋の敵の位置をアップロードしてくれ。）

風牙が要請してすぐにアップロードがされる。

（なんとかなる??）

（ああ。なりそうだ。出るタイミングは香澄に任せる。）

（じゃあ10秒後に突入。8、7、6、5、4、3、2、1、突入。）

香澄のカウントと共に風牙は通気孔から出た。

いきなり人が上から降って来たので兵隊の動きが一瞬止まる。

そのすきに風牙はナイフを2本投的し2人の喉を直撃させた。

残りの1人はやっと反応して風牙に銃を向けたが風牙の回し蹴りが下顎に直撃した上に壁に頭を打ち付けた。

（またまたさすが。）

（さすがって思っただったら戻ってからキスぐらいしてくれよ。）

（うゝん。考えとく。その部屋をでて左の突き当たりの部屋にターゲットがいるわ。護衛兵は3人。）

（3人か……。不意打ちはできねえの??）

（弱冠無理があるわね。ま、風牙なら大丈夫よ。頑張って!!）

無責任な事を香澄が言い始めたので、風牙はこれ以上香澄に頼る事をやめた。

（まあなんとかなる……。か。）

（そおそお。風牙がちゃんと努力してたのは私が知ってるよ。）

独り言のつमりのセリフに律儀にも返事を返す香澄を無視して風牙は部屋を出た。

そのままターゲットのいる部屋の前まで行き、普通にドアを開けた。

「……なんだお前は??」

護衛兵3人が一斉に銃を構える。

風牙はターゲットの隣にいる護衛兵に向かってナイフを投的すると共にミリタリーナイフで自分の近くの敵を攻撃した。

(危ない!!)

頭の中で香澄の声が響くと同時に銃声がした。

正確に心臓を狙った弾は風牙の心臓に到達する前にミリタリーナイフに阻まれた。

「悪いな。銃はけっこう前に克服したんだ。」

そう言い放ち風牙は最後の1人も倒した。

(早くしないと銃声聞いて誰か来るかも。)

香澄の声と同時に風牙がターゲットに近付く。

縄を解いてターゲットを抱き上げた時風牙は不覚にも

(うわっ!! 感触までリアルだなあ。柔らけえ。)

と思ってしまった。

(……変態。)

「か、かってに頭覗くな!!」

思わず声に出して叫んだ時、足音が近付いて来た。

(香澄、脱出経路の指示頼む。)

(じゃあそこの窓から降りて。)

(窓!?)

(3階だから大丈夫。)

風牙はこれ以上文句を言わずにワイヤーを使って下に降りた。

(もう監視カメラ制御しなくていい??)

(ああ。大丈夫だ。)

そう言って風牙は行きと同じ方法で壁を乗り越えた。

「ミッシェンコンプリート。作戦時間25分32秒。シュミレートを終了します。」

地面に足が着いた瞬間音声が流れて景色が歪んだ。

第18話

「じゃあシュミレーション試験合格を祝ってかんぱーい!!」

香澄の一言で宴会が始まった。

結局風牙と香澄は学年最速タイムで試験を終えた。

今日は1年生の寮のあちこちで宴会が行われているはずだ。

落ちた組はいなかったらしく、来週から成績準に現場に派遣されるらしい。

風牙チームと晴樹チームと他の組の3組で現場に行くはずだったが、その他の組の男子が怪我をして来週からは現場に行けないらしく、正史チームが食い込んだ。

「現場体験も結局この3組かよ。」

「いいじゃん、いいじゃん。気軽にできるよ。」

いつの間にか親密になった正史と遙が楽しそうに話している。

ちなみに風牙達の宴会は雄平の部屋で行われている。

理由はごく簡単。

女子寮に男子は入れないから香澄と遙の部屋は無理、風牙と正史、晴樹の部屋は30階で上がるのが大変。

よって雄平の言い分も聞かずに香澄と遙が勝手に決めたのだ。

晴樹と雄平はトップを風牙と香澄に取られたのがショックだったらしく。

2人で反省会を開いている。

香澄は遙と騒ぎながら時々正史といちゃつく遙を茶化していた。

風牙はと言うとジャンケンで負けたので自分の買い出しに行かされていた。

風牙が帰って来るまでに現場体験の説明をしておこう。

今は1月なので2年になるまでの3ヶ月、第一回現場体験が行われる。

現場体験とは実際に世界平和維持軍で働いている人と共に簡単な作

戦を行うのだ。シュミレートとは違って失敗したら死ぬと言う緊張感を味わうためだ。

毎年学年の最後に進級試験代わりにある。

学年が上がるにつれて難易度も上がるのだ。

そうこうしてる内に風牙が帰って来た。

「さっぶ。ってかいろんな所で騒いでるなあ。」

「当たり前じゃん。みんな嬉しいもん。」

香澄が風牙の手から食材の入ったビニール袋を取る。

「足りねえもんあっても知らねえからな。」

「大丈夫よ。鍋だもん。足りなかったらその辺のもん入れたらいいの。」

そう言っで香澄は遙を引っ張って台所まで行った。

せっかくの宴会なのにマズい料理は嫌だと言う事で料理は女子がする事になった。

それから3時間ぐらい食べたたり騒いだりと雄平の部屋を無茶苦茶にしながら6人は楽しい時を過ごした。

「じゃあそろそろ帰るかな。」

そう言っで正史が立ち上がる。

「え??? もう帰っちゃうの??? 遙も!??」

正史と一緒に立ち上がった遙を見て香澄が言う。

「うん。私は帰るって言っでも正史の部屋なんだけど。」

「マジで!?? 外泊届け出した??」

「ばっちし。今日は帰らないからよろしく。」

にやにやしながら正史と遙は部屋を出ていった。

「……あいつらいつからあんな関係??」

「……知らん。」

「片付けもしないで……。」

男3人の会話。

「じゃあ私も帰ろっかな!??」

香澄が複雑な顔をしながら言う。

「あ、じゃあ送っていつてやるよ。晴樹と雄平は片付けよろしく。」
風牙はここぞとばかりに部屋から逃げ出そうとする。

「片付けてから……!!」

「じゃあな。また明日!!」

香澄を引っ張って風牙が出ていった後の部屋で晴樹と雄平は男2人で悲しく掃除をするのであった。

「お前は正史と遙ちゃんの事知ってたのか??」

「うん。3ヶ月前だったかな?? スッゴい嬉しそうだったから聞いただしてみたら付き合ってるって。」

「全く知らなかった。」

風牙は、ぽりぽりと頭をかく。

「風牙はそおいう感覚に鈍感だもんね。」

「そんな事ねえよ。彼女いた頃もあっただろ。」

「それも全部コクられるまでわかんなかったんでしょ。」

「まあそうだけどな……。」

その後に何だか気まずい空気が流れる。

「……………」

「……………」

沈黙が続く。

「香澄はさ、マジで彼氏とかいた事ねえの??」

「無いわよ。ファーストキスは誰かさんに取られたけど。」

「な!! だからあれは……!!」

「事故だって言いたいんでしょ?? キスしといて事故はないでしょ。」

「

香澄はすねたようにソッポを向く。

「……バカ……。」

「は??? 何だよいきなり。」

「寒い。」

「は??」

「だから、寒いって言ってるの!!」

いきなり怒りだした香澄に風牙は戸惑う。

「まあ1月だしな。」

「違う!!もうなんでわかんないかな!!」

香澄がさらに怒る。

それを見て風牙はにやにやしながらこう言った。

「わかってるって。こう言う事だろ??」

そう言って風牙は香澄の手を取った。

香澄はからかわれていた事に気付き口をパクパクさせた。

「手なんて繋ぐの何年振りだろうな??」

「あなたはそんな昔じゃないでしょ。」

「お前と手繋ぐのだ。10年振りぐらいか??」

「小学1年生以来だもんね。」

それから2人は何も喋らずに手を繋いだまま女子寮まで歩いて行った。

「じゃあ……また明日ね。」

香澄は風牙の方を見ずに言った。

「ああ。」

風牙も香澄を見ずに返事をする。

「……お、おやすみ!!」

無理に明るく言って香澄は走ろうとしたができなかった。

「ちょ、風牙??」

風牙が香澄の手を放さなかったのだ。

「どうかし……!!??」

香澄が言い終わる前に風牙は香澄を抱き寄せた。

「ちょ、ほんとにどうしたの!?!確かにそおいう雰囲気だった……
じゃなくて!!」

香澄が顔を赤くしながらテンパる。

「外泊届け出して着替え持って来い。」

風牙が香澄の耳元で呟いた。

「い、いいの?？」

「ああ。」

そう言って風牙は香澄の唇に自分の唇を重ねた。

第19話

宴会が明けた次の日は休みで、

「ふ〜ん。香澄、風牙くんのトコに泊まったんだあ。」

「なによ、その顔!!!」

「どうだった??? 初体験???」

「してません!!!!」

「ついに香澄、純粹じゃなくなったのかあ。」

などと言う会話があって、更に次の日。

「1年生の暗殺者クラス及び情報収集クラスは今すぐ多目的室に来なさい。」

すやすやと寝ている所に放送が入って不機嫌な生徒が多目的室に集まる。

「え〜と。じゃあ今から現場実習の講師と引き合わせを行う。それから……木村先生どうぞ。」

斎藤が説明役を放棄して木村に引頭を渡した。

「現場の行き先は講師と相談して決めて下さい。」

木村は斎藤を睨んでから説明を始めた。

「じゃあ今から組み合わせを発表するので呼ばれた生徒達は講師の所へ行きなさい。」

そう言って木村は名前を呼び始めた。

周りからぽつぽつと生徒が減って行く。

講師と引き合わせられた所は多目的室から出ていつているようだ。

「遅いよな……俺達。」

「忘れられてんじゃないの??」

「縁起でもない事言わないで。」

風牙達は他の生徒と講師が多目的室を出ていつている間、私語楽しんでをいた。

「……残ったな。」

「案外、風牙の冗談がマジになったかもな……」

雄平と晴樹の会話に反応して周りを見渡してみると生徒は1人もいなく、講師も残ってはいなかった。

「あゝ。その6人ちよつと来い。」

斎藤がやる気のなさそうな声で呼ぶ。

「先生！！私達の講師は??」

「忘れられてるってやつ??」

香澄と遥が斎藤に近寄りながら聞く。

「ま、まさかお前が講師!!」

「東武、俺に対してお前って言うな。それと残念ながら俺は講師じゃない。」

斎藤の言葉に風牙だけじゃなく、正史と晴樹までもが安堵の溜め息をもらす。

確かに斎藤みたいな適当な講師は嫌だろう。

「お前達の講師はまだ来てないだけだ。」

「何で来てないんですか??」

「遅刻だ遅刻。」

「お前達の講師は少し特別なんだ。」

「スペシャルコーチって奴!??」

「すげーじゃん俺達!!」

騒ぎ出す風牙、香澄、正史、遥をほったらかしにして斎藤は

「あいつら黙らせとけ。もうすぐ来る。」

そう晴樹と雄平に言って多目的室を出ていった。

それから10分間、茶化しに来る風牙を適当に捌きながら晴樹と雄平は、騒いでいる4人を止めようとはせず静かにまっていた。

「ごつめーん!!遅れちゃった!!」

いきなり多目的室に女の声が響く。

「ちよつと忙しくてさ。でも急いで来たから許してね。」

風牙と正史、さらに晴樹と雄平までもが顔を見合わせる。

「誰だあの美人??」

「状況からすると。」

「…………俺達の講師…。」

「……だな??」

風牙と正史だけじゃなく、晴樹と雄平まで絶句させるほどの美人が入って来たのだ。

すらりと延びた鼻筋、淡く紅を帯た唇、セミロングの髪、全体的に化粧っ化はなく、清純なイメージを思わせる。

こうなるとアプローチが一番上手いのは風牙だ。

早速その美人講師に歩み寄る。

「あの、講師の方……ですよね??」

「うん。そうだよ??」

「光栄です!! あなたみたいな綺麗な人に…………!!」

風牙が全部言い終わる前に香澄と遙が風牙を突き飛ばす。

「あ、あの……あなたはもしかして…………。」

2人共目を輝かせている。

男達はなぜ香澄と遙が目を輝かせているのか不思議で顔を見合わせる。

「私の名前は雁原優華。平和維持軍の幹部とでも言おっかな??"とにかくあなた達の現場講師をする事になりました。よろしくね。」皆さんもう分かりましたか??

何を隠そう、あの雁原優華です。

今まさに雁原優華が再登場しました。

第20話

雁原優華……10年前の『あの日』黒き征裁と共に活躍した西院学園の生徒、今は平和維持軍のトップ集団を構成するエージェント。奈々原朋美、寒川綾と共に平和維持軍の女子部を統括する。

「才色兼備を絵に書いて、色を塗ったら雁原優華になるって言われてるくらいなのよ?」

「それはちよつと誉めすぎだよ。」

「そんな事ありません!! 優華さんは全国の女子の憧れなんです!!」

今は香澄と遙による優華を誉め千切る話が15分も続いている所だった。

「それより早く行き先決めないと!!」

「でもこいつらまだ優華さんのすばらしさわかってません!!」

遙が男子陣を指差しながら言う。

「もうわかってるよ。ね?」

優華に聞かれて男4人は一斉に首を振る。

全員優華の前で緊張しまくって一言も喋っていない。

「決めないと私が困るんだから。ほら、香澄ちゃん、遙ちゃんを座らせて。」

立ち上がって優華について喋ろうとする遙を香澄が座らせる。

「じゃあドコがいい?? この紙に書いてある候補地ならドコでもいいから。」

優華はそう言って全員に紙を配る。

紙を見て少し会話を交した晴樹と雄平が発言する。

「……セントラルクがいいと思う。」

「どうしてそう思うの??」

「セントラルクにはゲリラ軍に武器を支給していると噂される会社がある。」

「晴樹くんと雄平くんはその辺の事に興味あるんだ。」

晴樹と雄平の意見に正史と香澄、遙も賛成を示す。

「風牙くんは反対なの??」

優華につられて皆が風牙の方を向く。

「はい、セントラルクは田舎だから……。」

「はいはい。優華さん、風牙も良いつて。」

風牙が最後まで言う前に香澄が止めてしまった。

「いいの??」

「あ、はい。もういいです。」

風牙は香澄に睨まれて『田舎は不便だから嫌だ』と言う意見を引く
込めた。

「じゃあ決まりね。セントラルクに決定!!」

優華は花の様な笑顔を見せた。

「そうだ。香澄ちゃんと遙ちゃんはちょっと付き合ってくんない?
?」

「何かするんですか??」

「黒征学園を案内して欲しいんだけど。」

「喜んで!!」

そう言って女3人は行ってしまった。

第21話

「へえ。じゃあ正史くんて遙ちゃんの彼氏なんだあ。」

香澄と遙は優華を連れて理事長室を探しているところだった。

優華は高波雄輔に用事があるらしく理事長室に行きたいのだが、香澄も遙も理事長室の場所を知らない。今は学園案内をしながら理事長室を探しているところだった。

「そおなんですよ。始めは風牙くんを狙ってたんだけど香澄がねえ。」

そう言って香澄の方を意味ありげな目で見る。

「え！？香澄ちゃんて風牙くんと付き合ってたの？？」

優華は目を輝かせながら香澄に迫る。

「えっ……と、幼馴染みって言うか……恋人って言うか……。」

「って事は恋人だねっ！！」

優華が照れる香澄をほったらかしにして結論付ける。

「そ、そお言う優華さんはどうなんですかつ！？」

香澄は焦りながら優華に話題を振る。

「あ、それ私も気になるなあ。優華さんキレイだからなあ。」

「私は今までで1人しか付き合った事ないんだよ。」

優華は誇らしげに言う。

「「うっそお！？」」

2人が声を揃える。

「ちなみに今も続いているのかな？？10年目。」

「ホントですかあ？？でもすっごく一途そうです。」

「ってかどんな人なんですか？？」

香澄も遙も目が輝いている。

「漣亮って知ってる？？」

「漣亮……それって……！！」

「『黒き征裁』の名前じゃあ……。」

2人が顔を見合わせる。

「そ、私の彼氏♪」

優華が見るだけで死んでもいいと思える様な笑顔を見せる。

「え…でも……。」

香澄が声を濁す。

「死んでるって??大丈夫よ。約束したもん。」

そう言っつて優華は10年前の事について話し始めた。

「すごい……いいなあ。」

「懂れる……。」

優華が話し終えた時、香澄と遙はより一層目を輝かせていた。

「すごいロマンチックですね!!」

「めっちゃくちゃ理想のカップルです!!」

一気にテンションが上がって喋りまくる香澄と遙。

「さすがだよねえ。優華さんみたいにキレイだったらそんな恋愛で
きるのかなあ。私もキレイになりたいなあ。」

「香澄……あんたがそれ言うと言葉を遙が勝手に作った所で優華が声をかける
ツコいい彼氏と幼馴染み恋愛してるじゃん。」

幼馴染み恋愛と言う言葉を遙が勝手に作った所で優華が声をかける。

「理事長室あったよ。」

見事な肩透かしだった。

優華が2人を促して理事長室に足を踏み入れた。

「こんちわゝ。高波さゝん。いますかあ??」

優華の言葉に奥にいた雄輔が顔を出す。

「おう。雁原か、久しぶりだな。」

「だって高波さん本部に顔出してくれないじゃん。」

「俺も忙しいんだよ。」

優華は勝手に椅子を三つ引っ張り出して来て香澄と遙を座らせて、
自分も座る。

「で、何の用だ??」

「亮……見付かった??」

優華は真剣な顔で聞いた。

優華が真剣になったので、香澄と遙は無駄に緊張してしまった。

「いや・・・見付かってないな。」

「そっかあ。やっぱり自分で探すしかないかあ。」

優華はため息をついた。

「自分で・・・か。じゃああの噂は本当なんだな??」

「うん。平和維持軍辞めて自分で探す事にする。」

優華の言葉に香澄と遙が顔を見合わせる。

「そうか。だから最後に講師か??」

「うん。一応講師も経験してきたかったからね。」

優華はそう言って微笑んだ。

「さすがにそろそろ会いたいなって。」

そう言った優華の目はどこか悲しそうだった。

第22話

それから1週間、風牙の抵抗虚しくセントラルクに行き先が決定した。

最終的に風牙は優華と香澄の説得に応じた。

行き先が決ってからと言うと、晴樹と雄平は調べる事があるらしく一日中パソコンに向かっていた。

その他4人わ大して事もせず、ただ普通に過ごしていた。

そんなこんなで出発当日。

風牙は遅刻した。

「わりい！！遅れた！！」

「昨日時間厳守って言ったでしょ！？」

「すみません…。」

優華は反応したがその他はあきれて無視。

結局、風牙は肩身狭い思いでセントラルクに着くまで過ごしたのだった。

東側は海、西側はジャングル、北側は山、南側に他の町と繋がる道が通っているだけの町：それがセントラルクだった。

町の西側に議会などの重要機関が入った建物がある。

そこが今回の実戦訓練の場所らしい。

今回の作戦は3人同時に行なうらしい。

チームワークが大切になる作戦だった。

「じゃあ今から任務内容の説明するね。」

場所は町の一角のホテルの一室。

そこで作戦内容が伝えられていた。

「この町の一番おっきい建物はセントラルクタワーって言うんだけど、その最上階にあるフロッピーディスクを取って来て欲しいの。」

「それだけ!？」

風牙が優華の顔を見る。

「警護はA級よ!？それに窓は西側にしかないし。」

「西側か：ジャングルに隣接してるんだな。」

晴樹が図面を見ながら呟く。

「まあ3人全員が最上階まで行くのは無理よねえ。」

「陽動作戦か??」

「それが一番確実ね。」

遙と正史の提案に優華が相槌を打つ。

「あ、じゃあ俺らが最上階に行く役で。」

「はあ!？なんでよ!!最上階までナビゲートする私が嫌なんだけど…。」

「風牙くん、そう言うと思った。」

「じゃあ俺達は陽動係だな…。」

雄平が早々と結論を出し、優華の意見を聞くものはいずに決定した。
「細かい作戦は随時指示するから。大まかな情報は明日までに読んで。」

優華はそう言いながら資料を人数分渡し解散を言い放った。

正史と遙は部屋で資料確認を一緒にするらしく、晴樹と雄平は情報なんかとつくの昔に頭に入ってると言う事で少し早めの就寝をしに部屋へ帰った。

結局残った3人は黙って資料を読んでいた。

15分ぐらいたつと風牙が資料を閉じた。

「丸暗記しろとは言わないけど大体の事は暗記しててね。」

資料を閉じたまま見ようとしないうちに風牙に優華が言う。

「もう覚えたから大丈夫ですよ。」

「もう覚えたの??一回読んだだけじゃ…。」

「大丈夫ですよ、優華さん。風牙、昔から暗記めちゃくちや早いんです。この程度なら一回読んだだけで暗記できるはず。」

香澄も資料を読み終えたのか会話に参加してきた。

「へえ。なかなかすごい特技じゃん。」

優華は香澄に意味ありげな視線を送る。

「あ、それとあなた達2人には言っとくけど、最近ゲリラ軍の活動が活発らしいわ。つまり。」

つまり、ゲリラ軍の動きが活発と言う事は武器の消耗が激しいと言う事だ。

つまり、セントラルクにゲリラ軍が武器購入の為に来ている可能性があると言う事だ。

「だから…気をつけてね。特に風牙くん。」

「へ???俺???」

いきなり話を振られてびっくりする風牙。

「香澄ちゃんの事…困らせたらダメだよ。」

どこか悲しそうな顔をしながら優華は言った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9005a/>

白い暗殺者

2010年10月23日14時07分発行